令和５年度「ちばっ子の学び変革」推進事業（「学力・学習状況」検証事業）研究状況報告書

鎌ケ谷市立第二中学校

１　学校紹介

本校は、全校生徒数６４１名、２２学級、職員数５９名の学校である。学校教育目標は、「心豊かで、たくましく生きる生徒の育成」であり、職員は、知・徳・体の基礎を身に付け、自己の将来と郷土の豊かな将来を創造する生徒を育てることを経営の重点としている。生徒は、非常に落ち着いており、授業にも真面目に取り組んでいる生徒が多い。

２　研究主題

目的に応じて自分の考えを書くことができる生徒の育成

３　研究の概要

（１）生徒の実態と課題

令和４年度の全国学力・学習状況調査の国語の平均正答率を見ると、全体的には千葉県・全国の平均正答率を下回っている。選択式の正答率は千葉県・全国の平均をやや下回っているが、短答式、記述式の正答率は共に千葉県、全国の平均正答率を大きく下回る結果となった。以下、問題形式ごとの分析を記す。

選択式の問題については、特に「書き直した文字の『と』の書き方について説明したものとして適切なものを選択する」問題の正答率が低い。この問題の主旨が「漢字の行書とそれに調和した仮名の書き方を理解する」ことから、楷書や行書などの知識事項が定着されていないことが推測される。

短答式の問題については、「文脈に即して漢字を正しく書く」問題や「場面の展開や登場人物の心情の変化などについて、描写を基に捉える」問題の正答率が低い。漢字の使用については、ＩＣＴ機器が身の周りに溢れている日常生活の中にあって、変換することはあっても書くことはしないという実態が浮かび上がってくる。また、文学的文章の読み取りは正答率が半数程度であることから、話の展開を捉える力や読み取った情報を処理し直すことが苦手であることが推測される。

記述式の問題については、「自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫して話す」問題や、「場面と場面、場面と描写などを結び付けて、内容を解釈する」問題の正答率が低い。両問題に共通している力として、目的を理解して自分の考えを記述することが挙げられる。ここには「資料や文章の内容を理解する」「自分の考えを形成する」「考えを記述する」「他者に伝わるようにまとめる」など、いくつもの能力が要求されている。両設問において無解答率が２割から３割程度であることからも、書くことへの抵抗感や文章構成の仕方を確認することが本校の生徒にとって大きな課題であると言える。

生徒質問紙について、「読書は好きですか」という質問や「１、２年生のときに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか」、「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」という質問について、肯定的な回答が千葉県・全国平均共に下

回っている。このことから、一定量の文章を読むことや読み取った内容を基に自分の考えを形成することへの苦手意識が強く、学習内容の振り返りが為されていないために学習事項の定着ができていないことが推測できる。

（２）学力向上のための取組

（１）で述べたことを踏まえ、本校では次のような仮説を立てた。

仮説

・読書活動を継続して行うことで、文章を読むことへの抵抗感が軽減され、文章を適切に読み取る力が高まるだろう。
・振り返りシートを活用し、その時間で学習した内容や成果・課題などを自分の言葉でまとめることで、書くことへの抵抗感が軽減されるだろう。
・国語の授業の中で、文章の書き方や文章を書く上での表現の工夫を指導し、自分の考えを他者に書いて伝える課題を設定することで、目的に応じて自分の考えを書く能力が高まるだろう。

上記の仮説を検証するために以下の取組を実践した。

朝読書の導入

本校は昨年度まで国語・社会・数学・理科・英語の５教科の基礎・基本の定着を目的とした朝学習を行っていた。この取組を全校統一で朝読書に変更した。「一定量の文章を読んだり、触れたりすること」を目的とし、読書の際に読む本として適切なものを国語科や学校司書が提示し、毎朝１５分間読書する習慣付けを行った。

振り返りシート（自己評価カード）の活用

国語科で統一した振り返りシートを活用し、授業で学習した内容について「今日の学習でできたこと、分かったこと」や「今日の授業でできなかったこと、分からなかったこと」、「今日の授業の中で生じた疑問」、「次回の授業に向けて、自分が取り組んでおこうと思うこと（予習・復習）」などを記述させた。この活動を継続的に行い、書くことへの抵抗感の軽減や学習事項の振り返りの場を設定した。

文章構成の仕方や目的を意識した記述の指導

各学年の国語の授業において、文章構成の型や接続する語句などを繰り返し指導するとともに、記述をさせる際に対象や目的を明確にした文章を書くよう指導した。また、生徒が行う活動の例として教師見本を作成した。

記述による課題の設定

単元の中に「自分の考えを書いたり、学習のまとめを自分の言葉で書き表す」活動を取り入れたり、定期テストにおいて短文での記述や作文の問題を設定したりした。また、直接書くことに抵抗感を抱いている生徒を想定し、市から貸与されているタブレット端末の文書作成ソフトを用いての記述活動も取り入れた。

校内研究授業の実践

学期に一度、東葛飾教育事務所の指導主事や鎌ケ谷市教育委員会の指導主事を講師として招き、「書く」活動や「読む」活動の実践について指導・助言を受けた。

１学期　令和５年６月２６日（月）　授業者：河口　隼人
２年　　単元名「文章の構造を意識した説明文を書こう」
教材名「日本の花火の楽しみ・水の山　富士山」
講師：千葉県教育庁教育振興部学習指導課　指導主事　溝口　　真
千葉県教育庁東葛飾教育事務所指導室　指導主事　木村　尚史
鎌ケ谷市教育委員会生涯学習部学校教育課指導室　指導主事　新井　　翔

２学期　令和５年１０月２６日（木）　授業者：熊谷　正輝
１年　　単元名「目指せ！詩の解説ユーチューバー！」
教材名「河童と蛙」
講師：鎌ケ谷市教育委員会生涯学習部学校教育課指導室　指導主事　新井　　翔

３学期　令和６年１月２６日（金）　授業者：稲葉　菜穂
１年　単元名「後輩に説明しよう。これが第二中学校だ！」
教材名「言葉がつなぐ世界遺産」
講師：鎌ケ谷市教育委員会生涯学習部学校教育課指導室　指導主事　新井　　翔

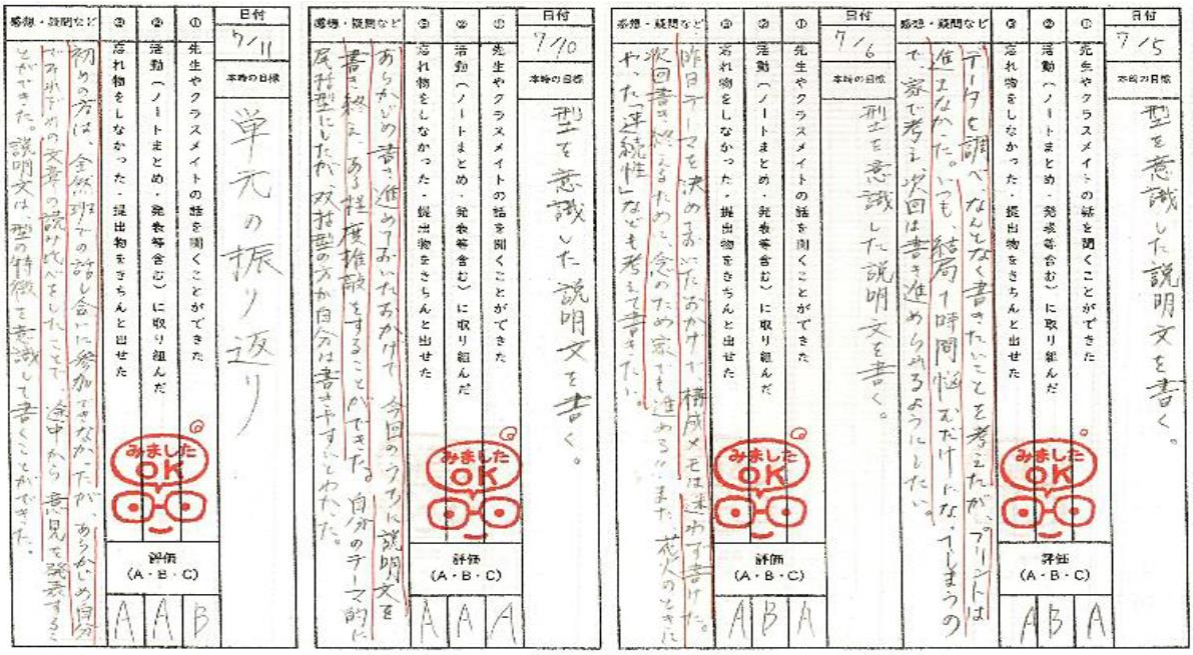
（３）加配教員（学習サポーターを含む）の活用

加配教員は、主として生徒の作成した作文の添削指導を担当した。加配教員を活用することで、基本的な文法上の誤りから文章構成に至る記述全般に関する、生徒の作文への細かな添削が可能となった。この指導によって生徒自身がどこを改善すればよいのかを意識することができた。

４　成果

・朝読書を導入したことにより、生徒が文章に触れる機会が増加し、文章を読む速度が向上した。また、朝読書を導入した影響からか、休み時間や昼休みなどの時間や給食の準備中などに読書する生徒の割合が増えた学級があった。読書をする機会が増加したことにより読書量が増え、相対的に学校図書館の利用生徒も増加した。
・振り返りシートを活用したことで、「短い文章を書けるようになった」「振り返りシートを具体的に書くこと」ができるようになったなど、書くことへの抵抗感が軽減された生徒が増加した。また、学習事項の振り返りの場を継続して設定したことで、図１のように学習内容について「この時間で何ができた／できなかったか」「次回の授業までに何をするか」といった振り返りを自分の言葉で具体的にまとめられる生徒が増加した。

図１



・国語の授業において継続的に、文章の構成や対象や目的を意識した記述を課題として設定したことによって、１学期に行った「投書を書く」という単元では図２のように、アンケート結果や身の回りの事象、調べた内容（実線）から、自分の意見（破線）を記述できる生徒が増えた。また、２学期末に２学年の国語の授業内で実施したアンケートの「あなたは、今学期の授業を通してどのような力が身に付いたと思いますか。」という質問において、「推薦文や内容をまとめる授業が多かったため、文章を素早く書く力が身に付いた」「自分の考えを書くのが多かったから文章能力は１学期に比べて上がった」などと、身に付いた力の中に「書く」に関する内容を回答する生徒が３分の１程度いた（１学期は４分の１程度）。記述活動については、学習サポーターに作文の添削をしてもらうことで、担当だけでは行えない細かな指導が可能となり、生徒の作文の質の向上につながった。

図２

５　今後の課題

・様々な文章に触れたり文章を読むことへの抵抗感を軽減したりする観点から読書活動は継続させつつ、書く機会の増加の観点から読書カードのように本の紹介や本についての感想などを書いてまとめる活動を取り入れることも必要ではないだろうかと考える。

・１２月に２学年の生徒を対象に実施したアンケートにおいて、「書く活動は必要か」という質問に対し、９割程度の生徒が「必要である」と回答していた。一方同アンケートの「書く活動を行うときに困ることは何か」という質問に対し、「どのように書けばよいか分からない」と回答した生徒は半数を超えた。このことから各教科で「書く」活動を行う際に活動例や書き方の手順、方法などを提示していく必要があると考える。

・今年度の取組によって「自分の考えを書く」という部分については一定の成果を得ることができた。しかし前述したように、記述課題に対してどのように書けばよいか、書き方自体が曖昧な生徒は依然多く、生徒の成果物から「目的に応じて」という部分への指導もまだ不十分であると感じている。国語の授業の中で、文章の書き方や文章を書く上での表現の工夫を指導し、自分の考えを他者に書いて伝える課題を設定することは来年度も継続して行いたい。また、「目的に応じて」の部分については、１年時には教師側が対象者や目的などを明確にする必要があり、学年が上がるにつれ、目的等の設定者を教師から生徒へと移行していけることが理想である。そのためにも来年度は各教科において「何のために書くのか」という目的意識をもたせた指導を行っていきたい。

・これらの課題を職員で共有し、来年度も「目的に応じて自分の考えを書くこと」をテーマの中心に据えて、各教科で実践内容を共有する体制を構築したい。